
王妃様の副業

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃様の副業

【Nコード】

N2333P

【作者名】

碧

【あらすじ】

美しく才気あふれた家族の中で唯一平凡なお姫様は同盟国の若く優秀な王様と結婚して王妃様になりました。でも、美しいお姫様がやってくると信じていた嫁ぎ先の人達は落胆してお姫様をいじめました。王様も王妃様と会おうともしなかったのです。王妃様は「お飾りの王妃様」として馬鹿にされ続けました。

そんな王妃様は病気を理由に部屋に引きこもって泣いて暮らして・

・

「よっしゃ！締め切りに間に合った〜」

なんてことはなく。

「一国の王妃様が物書きを副業にしないでください」

これは本業王妃副業他国にも知れ渡った覆面作家な王妃さまの物語。

王妃さまの日常（前書き）

ぽんとおもい浮かんだお話です。

王妃さまの日常

美男美女揃いの王族の姫として生まれて早18年。

外見も人間性も能力もとんでもなく恵まれた家族の中で何故か私だけが地味な外見と特に褒められる所のない平凡な性格と突出した才能など皆無の一般的な能力しか持たなかった。

ここまで毛色が違えば母の不貞やら取り替えなどが疑われそうなものだが双子の妹は才媛と謳われた母そっくりだったことと医師の資格を持つ（母の出産を他の者に任せたくないという理由だけで取得）父本人が私たちを取り上げているので一応血の繋がりは疑われてはいない。だがそれ故に周囲の私を見る目はそれはそれは冷やかであつた。

「王家の恥さらし」「ハズレ姫」などなど親戚臣下国民問わず散々いろいろ噂されあるいは面と向かって暴言吐かれた。

なまじ両親や兄弟達は私にたいして過保護で傍目にもわかるぐらい大切にしてくれたから余計に私の存在は彼らの信者の気に障り小さな頃から厭味ややつかみが後を絶たない。

そんな生活環境で育った私は当然ながらひねくれた性格に育った。家族を毛嫌いしたりしない。寧ろ彼ら以上に大切に愛しい存在なんてない。

針のむしろのような生活の中で家族の存在だけが私の心を支えたかけがえのない光なのだ。きっと私は自分自身より家族の方が大切なのだ。

依存している。執着している。

だって彼らにまで嫌われて蔑みの視線を向けられたらきつと・・・
・私は絶望してしまうから。

私が生きている理由なんて「私が死んだら家族が悲しむ」この一点に尽きるのだから。

苑国の若干二十歳の若き君主である風葉ふうはは一年前、苑国と肩を並べる大国である夜来やらいから王妃として第三王女 風なぎを娶る。美男美女揃いの夜来の血を引きながら平凡な容姿の王女に失望したのか風葉は結婚してから今日まで妻の元を訪ねることはなく事実上の白い結婚状態に結婚数日で「お飾り王妃」と呼ばれ三ヶ月目には「側室を！」と野心ある臣下が声高らかに叫び一年が過ぎた今では完全に「忘れられた王妃」になってしまった。

故郷での扱いに加え嫁ぎ先でのこの仕打ち。病気を理由に公式の場は一切出てこずに後宮に引き籠った王妃は己の身の上を嘆いで暮らして……。

「ふふふん〜♪」

いなかった。

夫が一度も訪れたことのない王妃とは思えないほど地味……いや質素な部屋（これは彼女にたいして使われるお金が日々削られているため。本人はまったく気にしてない）で風は上機嫌に歌など口にしながらさらさらと机の上の紙に何かを書いていく。

床や机の上に積み上げられた書物に机の回りにいくつも散らばった丸められた紙屑。

よくよく見ればいくつもの本棚がありそのどれにも本がぎっしり詰まっている。女性らしい鏡台やドレスの入った衣装箆笥などかけらも見当たらない研究に没頭する学者のような部屋であった。間違っても一国の王妃、年頃の女性の部屋だとは思えない。

だがここは間違いなく苑国王妃の部屋なのである。

「フウ、終わった~~~~」

様々な意味で王妃らしくない相応しくないと自他共に認める苑国王妃は美人でもなく整っているとは言えない顔だったが彼女の浮かべる笑みは生き生きとしており彼女の纏う空気はどこか人を安心させた。

そう、彼女は美人ではないし才能に満ちているわけでもないが決して魅力のない女性ではなかった。周囲の心ない暴言のせいで多少捻くれ卑屈になる所はあるが他者を思いやり笑顔を絶やすことのない優しい心の持ち主だ。

彼女の家族と数人の人間しか彼女の魅力に気付いてはいない。

風自身ですら自分は誰からも眉をしかめられる人間なんだと思い込んでいた。

彼女の優しさや笑顔を好ましく思っている人間が確かにいることに全く気付いていない。風は悪意や嫌悪などの感情にはすぐに気付くのに自身に向けられる好意にはとんと疎かった。

そんな彼女の鈍感さと己のヘタレっぷりによって苦行を強いられる人間が一人この苑国にいるのだがその人物の苦悩を風が知るのはずっと未来の話になる。

話を今に戻そう。

風はゆうに百枚以上はある紙の束を紐でくぐる。パラパラと中身を確認すると満足したような頷き、背もたれに寄り掛かりながら伸びをした。

「うーん！出来た！」

そのままコキコキと固まった身体を解していると静かなノックの音と共に風の筆頭侍女である真奈が入室してきた。そして机で目に隈を作り王妃とは思えないほど地味で貧相なよれたドレス・・・明らかに徹夜しましたと言わんばかりの風の姿に真奈の美しい眉がピクリと神経質に跳ね上がった。

祖国でも子供の頃から仕え仕えられた幼なじみのような二人はそれゆえに互いのことが手に取るようにわかる。

真奈は風が徹夜で机に向かっていたこと。風は真奈が己のやったことを全て見抜き、昨夜キリのいいところで休むと言ったことを守らなかった風に対して静かに深く怒っていること。

互いに互いの考えと感情を正確に読み取った二人だったが力関係は明らかに静かに入口に佇む侍女の方が上だった。

「・・・風様？」

静かな、静か過ぎる声に風の身体が硬直する。

真奈は静かに本当に静かに笑っていた。・・・目は全然笑ってないが。

「えつとあの・・・」

「わたくし、言いましたよね？今日はどうしても欠席できない社交会があるから副業はほどほどにしてちゃんと休んでくださいっていいましたよね？」

「近い！近い！無表情な顔近付けて一息に喋らないで！！！！！」

無表情の中に隠し切れない感情を敏感に感じ取った凧が叫ぶが真奈は逃がさんと言わんばかりに主の肩を掴む。

「いいえ、今日こそは言わして頂きます」

凧の抵抗もなんのその真奈は静かに己の心の内をぶちまけた。

「一国の王妃たる者が物書きを副業にしないでください」

静かな声だった。なのに真奈のそれは先ほどの凧の絶叫よりも強く大きく聞こえた。

王妃さまの日常 2 (前書き)

王妃さまが副業を始めた理由編。ややシリアス？

王妃さまの日常 2

嫁いで最初に浴びせられたのは明らかな落胆と疑惑の目。続いて「できそこない」をつかまされた怒り。

嫌になるほど私の人生に着いて回るわねと風は怒るよりむしろ呆れた。

本当にこの国と祖国での扱いに差がない。どちらも風の地位には頭を下げててもその目は風を蔑み、疎んでいた。

明らかに自分より劣った者を見る目。

嫁いで数日で「王妃に相応しくないない。王に不似合いだ」と囁かれた。

一ヶ月後には王妃の間を使うことすら許されず後宮の1番隅っこの狭い空き部屋に移るように言われた。

理由を聞けば。

「王のご命令です。まあ、王妃様にあんなご立派な部屋は似合わないということですね」

とてもじゃないが一侍女が王妃に言っているいい言葉ではない。側に控えていた真奈が暴言と失礼極まりない要求に静かにブチ切れて暴れかけたが風が止めた。

外見だけなら彼女の方が王妃に見えるが実は真奈はその美しさに似合わず凶暴かつ暴れると手が付けられない。

夫は地味な風が気に食わないのか初夜にも姿を現さなかった。

風が夫の体温を感じたのはたった一回。結婚式の誓いの口づけのときだけ。

それからもう色々ありすぎた。暗殺毒殺日常茶飯事。

厭味嫌がらせも以下同文。

オマケに王の命令で部屋は変えられるは嫁入り道具は取り上げられるは食事は質素になるは……しまいには王妃のために使う金はないと言わんばかりに予算を減らされ公式の場に着ていく服にも困る始末。

本格的に厄介者扱いだなと思いつつ、凧は何も言わずただ現状を受け入れた。そして考えたのだ。生活のためには金銭を稼がなければならぬ。

副業が必要だと。

考えてためして辿り着いた副業が「作家」という職業だった。

最初は真奈の遠縁がこの国で小さな出版社をやっていて新しく創刊する雑誌に数ページだけ空きが出来てしまったので何か書いてくれないかと頼まれたのがキッカだった。

金欠だった真奈はすぐに依頼を受けたが定まったページ数で物語なり紀行文なりを書くのは難しかった。

流石の真奈も頭を抱えてしまい凧が代筆して短編を書いた。

異様なまでに読書スピードが速い弟にせがまれ即興で話を作らされていた経験が役に立ちすなりと凧は規定内の話を作った。そしてその短編がえらく反響がよく。凧たちは予想よりもずっといいお金と次の仕事の依頼を得たのであった。

王妃という立場上副業をしていることはばれるわけにはいかない。幸い出版社の人間は真奈が作者だと思っている。素性を一切明かさない「覆面作家」として活動することは可能だ。

そうして本業王妃。副業覆面作家という凧の二足の草鞋生活が始まった。

もっとも本業の方は全く期待はされておらず病気を理由に引きこもっていても誰にも文句すら言われない。むしろ恥だから出てくんなの空気をびしばし感じたぐらいだ。

最近では後宮に側室候補の姫君達を送りこまれ、王のお手付きになるのを今か今かと持っている。残念ながら王は側室候補に手をつけてないがそれは多分結婚して一年もたたない内に側室を作ったら風の実家に対して印象が悪くなる。それだけの理由だ。

扱いの悪さ、決して会いに来ないことから風が王に疎まれているのは間違いない。

遠くから聞こえてくる社交会のざわめきを自室で感じながら風は改めて己が必要とされていないことを認識した。

今日は王の誕生日を祝う宴だからいつも以上に盛り上がっていることだろう。後宮に住まう他の姫君達はきらびやかな衣装を纏いそれこそ夢のような美しさを醸し出しながら意気揚々と会場へと繰り出していた。一方、風は自室にいる。理由は「絶対出席していただきます」と宣言しドレスまで用意した真奈の努力は王の「今日は出席しなくてよい」という伝言によって泡と消えたからだ。

クルリと手に持ったペンを回す。

蔑みの視線を向けられることも悪意を向けられることにもこの心はもう何も感じない。

悲しみも憎しみも怒りも何も。

ただあるがままを受け入れるだけ。そうやって生きてきた。これからもうそうやって生きていく。

滅多に会えなくても家族がいて幸せなら生きていけるから。

「さて、依頼の小説を書きますか」

ペンが物語を書く。風の現実とは違う優しくて楽しくて最後は誰も
が笑う幸せな虚構の物語。

王妃さまの日常 3 (前書き)

今回は王妃さま出番なし。侍女である真奈から見た王妃さまとその家族。

王妃さまの日常 3

王妃である凧の輿入れと共に苑国にやってきて約一年。真奈は人生最大のストレスを感じ続けていた。

理由は勿論、苑の人間の凧に対する悪意ある言動にあった。

（凧様から止められなければ片っ端から血祭りにあげますのに）

伶俐な顔に何の表情も浮かべないまま内心では主を馬鹿にし続ける人間へのえげつない報復行為を思い浮かべる真奈。

（大体凧様のどこを見て馬鹿にしているの？たしかに他のご家族の方とは似ていらっしやらないけど凧様はとても可愛いわ。和むし表情豊かで魅力的な上に能力的にも決して劣る方ではないというのに）

そう、家族が常識外の優秀さだけで凧が優れていない訳ではない。むしろ家族に追い付こうと努力するし、好奇心も知識欲も人一倍もった人だ。なまじ幼い頃から夜来の王族と係わり合う機会が多かった真奈だからこそわかる。

（皆があの方々を褒めたたえる。だけど私はあんな人外魔境な人達（内面込み）よりも凧様のような人に仕えたい）

凧以外の夜来王族を思い出しちょっとだけ遠い目になった。

（あの方々が凧様の現状を知ったら苑国は確実に叩き潰されるわね）
むしろ、一年、何もなかったことの方がおかしいと真奈は真面目に思っている。

苑国の人間は夜来が凧を苑国に「厄介払い」したと思い込んでいる
ようだが実際は逆だ。

夜来は珠玉の姫を苑の王妃としたのだ。

（実際、凧様が苑嫁ぐと聞いてからの阿鼻叫喚はすごかった・・・
・）

揃いも揃って凧に骨抜きにされベタベタに甘やかしている親バカシ
スコン揃いの夜来の王族は舌を噛み切らんばかりの表情で凧の結婚
をつげた父親を除く全員が血の涙を流さんばかりに反対した。

「凧姉様を苑の馬の骨にくれてやるぐらいならいっそのこと押し倒
してわたくしのものにして閉じ込めてうふふあははな愛欲生活を実
現させますわ~~~~~!!!!!!」

常日頃から「お姉様がお兄様ならなんの迷いもなく禁忌の扉を開
きますのに~~~~」と豪語し、「姉を兄にしたい」という阿保な理
由で若干18歳にして最高位の魔術師に数えられるほどの実力と知
識を手にしてみせた凧の双子の片割れである姫は鼻息も荒くそう宣
言するなり本当に凧に襲いかかったので数人がかりで押さえ込み、
凧が嫁ぐまで監視がついた。・・・他の家族も似たりよったり
の反応だったことが1番怖い。

何故、夜来王がこの縁談を進めたのか真奈には心底謎であった。

凧は忠誠を誓うに値する人物であり、なにより真奈が生涯を賭けて
護ると決めた唯一の存在だ。

だからこそ、今、凧に与えられている不当な扱いに心底憤りを感じ
てしまう。

(全くもって腹立つことばかりですわ)

真奈は無表情に怒りの炎を胸に燦らせながら主を起こすために扉をノックした。

例え何が起きても・・・真奈が風の味方であることに変わりはない。

『なにを言っているの？真奈はこんなにも悲しんでるじゃない！苦しそうよ！なんで大人が気付いてあげないのよ！』

1番辛い時、誰も気付いてくれなかった自分の悲しみに真っ先に気付いてくれた人だから。

「風さま。徹夜をするなど私、何度も言ってますわよね？」

「ゴメンナサイ~~~~~~~~！だけど締め切りが~~~~」

・・・・・・呆れたり叱り付けたりすることも多いけどこの人が私の一生仕えると決めた主。

王妃さまの日常 3 (後書き)

夜来の王族は変わり者が多いです。みんな外見と能力と外面の良さに騙され無駄に神聖化し過ぎてます。そして全員性格に難有で風大好き。風本人は溺愛に盛大に引いてます。

王妃さまの日常 4

「解せませんわ」

「は？なにが？」

いつものように原稿を書いていた凧は手を止めて哀愁を漂わせ完成原稿を確かめていた真奈を見る。真奈はもう一度「解せません」と呟き、目の前の原稿に目をおとす。

「童話、本格歴史もの、恋愛ものに大人向けの表現過多な小説に推理もの・・・なんでこんなジャンルバラバラなんですの」

「え？生活のために決まってるでしょ。えり好みなんて許される立場ではございませんから」

カリカリと羽ペンを動かしながら何でもない風に答える凧に真奈のため息がさらに深くなる。

「恋愛経験も男性と子作りをした経験もないのに何故こうも生々しい表現が書けるのですか・・・」

「妄想」

「・・・・・・」

凧の迷いない答えに真奈は不覚にも黙り込んでしまう。

「後はうちの次兄の体験談？お相手の人達がなぜか微細漏らさず教えてくれたし」

「・・・・・・・・・・」

次の故郷に送る定期連絡で凧様に卑猥なことを吹き込んだ馬鹿者の処遇と下半身が緩い第二王子のことを王家一家の家族裁判にかけてもらおう。

きっと素敵なお叱り（私刑）が行われることであろう。

「真奈・・・・・・・・なんか空気が黒いよ？」

「きのせいですわ。凧さま」

「ふ、ふうん」

若干怯えた風な凧には真奈の背後にどす黒い空気がはつきりと見えた。

「で？何でいきなりそんな事を聞いて来たの？」

真奈の黒い空気は見ないことにしたらしい凧が書き終わった原稿を渡しながらそう聞けば原稿をチェックしつつ真奈も答える。

「出版社の人間に同じこと聞かれたのです」

「はい？」

こてんと首を傾げる凧に内心可愛いと悶えつつ真奈は淡々と語る。

「出版社には私が小説を書いていることになってますから。私の言

動からこんな多種多様な小説を書くように見えないそうです。特に恋愛ものはどんな顔で書いているのか想像もつかないそうですわ」

確かに。無表情が基本で性格的にもクールで男など必要ないときっぱり拒絶する空気を持っている真奈が愛憎溢れたり純愛だったりする恋愛小説を書いていると思ったそりゃ驚くだろう。

「その場は何とか凌ぎましたが対外的に私が小説を書いていることになっているので本人に聞いてみようと思ひまして質問させて頂きました」

「……………話はわかったけど今後どう答える気？」

先程の自分の発言に嫌な予感しかなかったがそれでも風は聞かずにはおれなかった。

「？妄想で書いている。または経験豊富な知り合いに細部に渡って取材をしていると答えます。」

当たり前のように答える真奈に風は机に伏せた。

「せめて……………妄想じゃなくて想像にして……………」

己が冗談混じりで言うのと真奈がいつもの口調で「妄想」と口にするのでは周囲への影響力が違い過ぎる。

と、言うか真奈の綺麗な顔で「妄想してます」なんて言って欲しくない。

「？」

不可解そうな真奈を凧は必死に説得した。

王妃さまの日常 5

いくら疎まれ、寵愛など望めない立場とはいえ、腐っても王妃。風を蹴落としその立場に立ちたいと願う者は星の数ほどれ。

(・・・だから引きこもってたのにな・・・)

子供の頃から山で遊んでいた(ナイフ一本で山に放置されたよ。愛情表現鬼畜な実の兄に三日も!)超健康優良児なのに病気がちだと嘘ついて部屋から出なかった。こんな展開になるって子供だって予想がつく。

「あ~~~~ら。王妃さま。ご機嫌よう。相変わらずなお姿ですわね~~~~」

背後から聞こえてきた厭味がタツプリと含まれた女の声とそれに追従するような笑いにウンザリした気分になる。

夜来の王族特有の闇のような黒髪は連日の締め切りラッシュで結い上げもせず地味な紐で結んでるだけ。纏うドレスは目の前の側室候補のきらびやかなドレスに比べたら質もお値段もかなり劣る。

そしてただでさえ地味な顔は徹夜でやつれ目の下の隈ができ、側室候補とその取り巻き達の嘲りを増長した。小説が煮ずまって気分転換に散歩でもしよ~~~~と暢気に部屋を出た数分前の自分をなかったことにしたくなった。

「あらあら王妃ともあろうお方が随分とみすばらしい恰好をなさってますわね~~~~」

ねつとりと絡みつくような厭味に直ぐさま「王妃」としての顔を取り繕う。内心では毛の先ほど揺るいでなんかないのに気弱で口答えなんか出来ない風を装う。黙って俯いた尻に次々と厭味が浴びせられる。

「夜来も本当に困ったものですわ。いくら美しく優秀な娘を手放したくないからといって尻さまのような方をわが国に嫁がせるなんて」

「本当になんて酷い」

「とてもじゃないですが尻さまと風葉さまとは……ねえ？」

「あらダメよ。そんなこと言ったら」

「そうそう。本当のことは人を傷つけるのよ？」

次々に浴びせられる悪意に尻は傷つき震える演技をしながらも冷静に彼女らを観察する。

（育ちの良い上流階級の厭味……次の小説に出す悪役の貴族のお嬢さまに使える！）

厭味を言っている方もまさか相手が自分達を「ねた」として見ていることなど知らず、また王妃が自分達が熱狂的に愛読している恋愛小説の作者だとも気付かず王妃に「厭味」と言う名の「ねた」をタップリと提供してくれたのであった。

後日、発行された新刊の恋愛小説にばっちり彼女らがモデルの悪役キャラがでていたのだが彼女達が気付くことはなかったという。

厭味という名のねた収集に成功した風はご機嫌だった。

思いがけないねたと気分転換が効をそうし煮詰まっていた構想が一気に進んだのだ。

「ふふふふ今日は外に出てよかったふふふ」

厭味だろうがイビリだろうが「ねた」に出来る彼女は根っからの作家であった。

王妃さまの日常 6

結婚してから夫に触れられたのはたったの一回。正直に言えば夫の顔が少々曖昧だ。

月光を紡いだような銀の髪が綺麗だなと思った記憶があるだけで肝心の顔はあまり覚えていない。案外緊張してたのか。と自分も普通の感性をもっていたことを発見した。そんなことを思い出したのはきっと今夜の月があまりにも美しく、夫を連想させたからだろう。

「・・・・・・・・散歩でもしようかな？」

何となくこのまま寝てしまうことが惜しい気がして風はごそごとと服を引っ張り出す。

一体どこから入手したのか騎士見習いの少年が着る制服を慣れた手つきで着て、服と一緒に置いてあった茶髪のかつらをかぶれば幼児体型も手伝ってどこからどう見ても騎士見習いの少年にしか見えなかった。

真奈に見付かると無表情の絶対零度の無言にさらされるので（真奈は説教も怖いが無言でただじっと侮蔑の視線を向けられた時が1番怖くていたたまれない）明かりを消し、ベットに眠っているように細工をした風は慣れた様子で窓から庭に降りる。脱走のしやすい一階を風はとても気に入っている。

警備が厳重かつ暗殺者対策のため脱走しにくい王妃の部屋から変えてくれてありがとう！などと多分嫌がらせをした人間達がいらない御札を胸に思い浮かべながら風は庭を歩く。

本来なら王の私生活の場である後宮の警備は厳重なはずだが王妃である凧が「お飾り」認定されているせいか凧の周辺に関していえば結構隙があった。

凧の部屋が後宮の端っこでかなり侵入しやすい。そのうえ警備の人数も少ない上にやる気のある人は少ない。

（まあ、ここ一年の暗殺者の数を見れば警備の杜撰さがわかるわね）
ボウフラのようにわいてくる暗殺者を凧の仕掛けた罠と危機察知能力と真奈の戦闘能力と数少ないまともに働いてくれている警備の騎士達とで凌いできたのだ。

疎まれているのも蔑みを向けられているのも知っているがだからと言って黙って殺されてやる義理は凧にない。ついでに言えば暗殺者をのして無力化したのちに彼らから情報を引き出すことも忘れない。プロは依頼主のことは漏らさないがそこはキッチリはいてもらう。ちなみにこの一年で口を割らなかった暗殺者はいない。

（・・・姉様直伝の聞き出し方法はよく効くなあ・・・まあ、真奈がやるからだろうけど）

女性であり王の第一子であるのにも関わらず王宮での華やかな生活を捨て、騎士の道を選んだ姉。実力主義の荒くれ者揃いの第13師団に自ら志願。泣いて王城に逃げ帰るだろうと誰もが思った。だが、姉は見事師団をまとめあげ、夜来最強と謳われるまでに育てあげた。

「あんた達！あたしの敵は？」

「「「俺達の敵です！！！」」」

「敵はどうする？」

「「「「殲滅です！！！！」」」」」

鞭片手に部下（どう見ても下僕だった）を悠然と見下ろす姉とその姉を恍惚の表情で見上げる屈強なマツチヨ達。

いまだあの光景と見た時の衝撃は忘れられない。

姉の見た目がどう見ても十代の可愛い系なのに（実年齢？イヤイヤ恐ろしくて口外できません）どうしてか鞭を構え、優雅に足を組み、部下たちを従えている姿が様になっていた。

そんな姉直伝の『方法』。一応命は奪わないし貞操とかも汚されないのは確かなのだが……。全力でその内容及び尋問光景の公開は避けたい。とにかく、そうやって情報入手していく過程で苑に置いての貴族の勢力図も見えて来ていた。

（やっぱり先代の残した負の遺産は根深そうね。中枢に結構な根を張り巡らせてる）

大国苑。だが先代は絵に描いた愚王で現王が夜来の協力を得て父王に反旗を翻し王権を奪取するまで苑は荒れに荒れた。先代の代から甘い汁を吸い続ける奸臣の暗躍が未だこの国に暗い影を落としている。そしてそいつらは王が夜来の後ろ盾を得ている現状が気に入らない。すなわち夜来との同盟の証である風が邪魔なのだ。

苑に蔓延る闇は深く狡猾だ。王権交代の時の肅正からも逃れ、虎視眈々と王を操る糸を張り巡らせようとしていた。

そして多分、王は風を利用して国の膿を全て取り除くつもりだ。

（苑王は父様とどんな密約を交わしているのやら）

風への扱いについては父へと伝わっているはずだ。そしてこの一年、実家からなにひとつ音沙汰はなかった。あの家族なら殴り込みぐらいやらかす。それが無いということは。

（父様がとめてると考えていいわね）

一年かけて集めた情報と知識。苑と夜来の情勢。ゆっくりと二人の王が思い描いている謀を探る。

（苑に嫁ぐ姫に妹達でも姉さまでもなく地味な私が選ばれた。・・・多分1番彼らの思惑通りに動くから選ばれた）

他の姉妹達だったら厭味や嫌がらせ、暗殺者を向けられた時点で過激に苛烈な報復行動に走るが風は全てを穏便に済ます方を選ぶ。そしてなにより彼女達では相手の隙を狙えない。その美しさも優秀さも警戒させる要素にしかないえない。

（そして私の容姿。夜来が「ハズレ姫」を苑に厄介払いした。すなわち夜来はこの同盟に全面的に協力的ではないとも見える）

苑と夜来の同盟に付け入れる隙があるように敵には映る。

もし、風が「事故死」あるいは「病死」したら？

夜来の後ろ盾はきつとたやすく王から消え去る。と思わせる。

（大筋はこんな感じ？暗殺者とかも多分本当に厄介なのは王の手の人から廃除してるみたいだし）

ゆつくりと考えをまとめた凧は空に浮かぶ月を見上げる。

（そして苑の膿を出せたら私はお役御免。夜来に帰されて苑王は今度こそ本当の王妃を娶る）

そのための「白い結婚」。

どこまでも凧を利用しつくしている。馬鹿にしている。

凧は当然怒って……。

（くうくうくうなんて！なんていいネタ！次の小説は国の謀に翻弄される姫の物語で決まり！ああ、勿論設定その他は手をいれて……特に主人公は要変更。私が主人公じゃ王道展開無理だし。ヤツバリ謀ごとに振り回されるのは薄幸な美人さんじゃなくちゃ！あとあと三角関係も外せない！利用するつもりが心奪われた王様と一途に思ってくれる幼なじみの騎士とか！）

思わぬネタ（メシの種）を掴んだ凧は思わず身もだえていた。そこに怒りや悲壮感が残念ながらかけられたりとも見当たらない。

（ああく父様、苑王様！いいネタ有難うございます！御礼に貴方がたの謀に全力でご協力します！取材にもなって小説もより現実的になりますしね！）

キラキラと生気に溢れた瞳でこの場にいない王達（ネタ元）に握り拳で誓う凧。……はたから見れば百面相をしつつ身もだえたり握りこぶしを作りながら熱い瞳を虚空へ向ける不審者にしか見えない。だから当然。

「貴様、そこで何、奇行に走っている」

明らかに気味悪がっている男の声が背後からかけられることになった。

王妃さまの日常 6 (後書き)

予定外に長くなったため出番が延びてしまったキャラが……。不敏です。が、なんか不敏さがそのキャラの基本装備な気がしないでもありません。

王妃さまの日常 7

風に対する不信感しか感じない声によって素晴らしきネタの世界から現実へと引きずり戻された風は夢から醒めた顔で声の主を探した。右左下上と首を巡らす風の奇行に声に呆れが混じる。

「後ろだ。後ろ。左右ならともかく何故下を見る」

男の突っ込みに風は内心冷や汗を流す。

風は苑王の顔をろくに覚えていない。いない、のだが夫に関して綺麗な銀の髪以外に覚えていることが一つ、ある。

『誓う』

あの日、聞いた夫の声と。

「貴様、何硬直している」

不審感を隠そうともせず風は肩を掴んで振り向かせた人物の聲がピツタリと重なった。

そのまま振り向けば目に入るのは夜風に遊ばれる月光のような銀の髪。

美形揃いの夜来の王族にも見劣りしない所か確実に張り合える美貌は本人の自覚無しに色気タダモレだ。

人外美貌には見慣れた風ですら一瞬目を惹かれた。

月光ですら従えているような銀を纏う男を風は一人しか知らない。

「苑王・・・」

苑の王族の特徴である銀色を今現在持つ唯一の人間である苑王 風葉は風の掠れた声に軽く眉をあげた。そして彼が何か言おうと口を開きかけ・・・何かに気付いたように背後を振り返る。探れば遠くから物凄い勢いで近づいてくる気配が一つ。

「・・・チツ」

行儀悪く舌打ちするなり苑王は風の腕を掴んで近場の茂みに隠れる。

「うあ！」

「シッ！静かに」

問答無用で口を押さえられた。問い掛けるように見上げると切羽詰まった顔で辺りを伺う苑王の横顔。

何だかこの数分で結婚式の時の会話と接触を越えてない？

と言うか何があったの？疑問詞が頭に浮かんでいたが風は取りあえず様子をみようとおとなしくした。

「ッたく！あの馬鹿王！どこ行きやがった！」

現れたのは見事な金髪をもつ中々の美丈夫な騎士。少し軽そうな印象がある。かなり上の地位の騎士のようだが主を馬鹿呼ばわりするのはいいのか？ここで本人に聞かれてるぞ。

等といらん心配をして側の苑王を見れば案の定、口元が少し引きつっている。

「餓鬼じゃないんだから執務から逃げんなっ一の」

え、王様仕事逃亡中？

王様、私の視線から逃げましたね？

「大方好きな女のことでも考えて幸せになってから現状を思い返して鬱になってんなろけど・・・はあ~~~~どこまでヘタレかつ自虐的なんだ？あいつ」

風の視線を更に避けるように首を背ける苑王。・・・・否定しない。ヘタレ肯定か。

（と言うか好きな女性、いたんだ、この人・・・）

思わぬ所で知った夫の恋愛事情に風は少々衝撃を受けていた。自分でも意外だがそれでもショックだった。だって・・・だって！

（折角思い付いたネタ僅か数分で変更？王様に相手いるんじゃないあ・・・三角関係は諦めて二組の恋人達のすれ違い？王様のキャラも間近で接するとなんか想像してたのと違うし）

夫に好きな人、己の地位を脅かすかもしれない女が存在を知った妻の反応はかなりずれていた。

（あ、でも、王様に本気で好きな人がいるなら応援してあげたいかも！どうせお飾り王妃だしお役御免になった後王様が滞りなくその人を王妃にできるようにしたい）

疎ましく思われても利用されても縁合って夫婦になったのだ別れることが決定なら気持ち良く別れたいではないか！

（王様が好きな人を妻にして幸せになったらサッパリとした気分でごくに帰れるわ。既婚暦つけちゃったのも気にする必要もないしね）

まさに一般の妻の考えから外れまくった思考に到達した凧はこの瞬間から苑王の恋を全力で応援することに決めたのであった。

「でだ、我が王は進展しない恋に見切りをつけていたいげな少年に慰めを求めたのですか？」

握りこぶしを作りながら恋の懸け橋を心に誓う凧の頭上から笑い混じりのそんな声が降ってきた。

視線を向けると茂みの上からこちらを楽しそうにのぞき見る騎士の笑顔に出会った。

王妃さまと王さまと騎士

騎士の言葉に苑王が鬼の形相に変わる。当たり前だ男色扱いは誰でも気持ち良くはない。今の凧は騎士見習いの少年姿。その上後ろから苑王に羽交い締めになれ口を塞がれている。たしかにただならぬ光景に見える。

まあ、凧が容姿的にかなり見劣りしているのだが……。

ニヤニヤしながらこちらを見ている騎士はもちろんわかっているの発言なのだろう。目が目茶苦茶楽しそうである。

（からかう気、満々だよ。この騎士さん）

どう見ても弟分をからかう兄貴分にしか見えない。苑王が真っ赤な顔で騎士に喰ってかかりそれを騎士がノラリクラリと軽くかわす。

「誰が男に走るか！！俺はあいつ一筋だ！！」

「あはは、十歳の時に八歳も上の女に惚れてから暑苦しく想い続けたんですよ~~~~うわ、重ッ！」

「同じ時に同じように年上に惚れたお前に言われたくない！」

「俺の場合は間に他の女とも付き合ったりしましたよ？貴方みたいに純愛は貫いてないです。いや？結婚したから違うのか？」

「もういい黙れ。それといい加減にそのふざけた物言いはやめろ」

心底やめてくれと言わんばかりの王に「これが俺の地ですよ？」と騎士が言えば王が噛み付いた。

「しれっと嘘をつくな！昔は真面目で堅物だったのに何を間違ったこんなチャラ男になるだ・・・？」

風を無視して身内の言い合いに突入した王様と騎士。逃げたい。幸い拘束は解けている。が、あの騎士、あんな馬鹿な言い合いをしてるくせに決して風から意識を逸らしてない。ジワリと威圧感を感じた。逃げられないと本能で悟る。

「まあ、おちよくるのはこれぐらいにして」

「お前、本当に俺を王と認めているのか？」

心ゆくまでからかい倒してイイ笑顔の騎士に王様は頭を抱えて主従の在り方について真剣に考えていた。

「で、君は誰？所属と名前あとは何故こんな場所にいたのかな？」

柔らかい口調なのに反論を許さない空気を感じた。とくとくと心臓が煩い。

「僕は・・・」

とつさに少年の声と喋り方を作る。大道芸人になりたい兄から教わった声色術がこんな所で役に立つとは・・・。人生何が起きるかわからない。だがここで正体がばれる訳にはいかない。

（流石に王妃が変装して外をウロウロしてたらやばいよね・・・）

だからなんとしてもこの場をごまかさないと。

「君は？」

騎士が促す。必死に言い訳を考える凧。どうにでもなれと口から出任せを言おうとした。

「実は！」「そこで集まって何しているのですか」なんです！」

凧の言葉にほぼ被せたように淡々とした女性の声が夜の静寂に響いた。

聞き覚えの有りすぎる声に凧は固まり、王は意外そうに目を見開き、そして騎士は真意の見えない笑みを浮かべながらその人物の名前を呼んだ。

「これはこれは。真奈殿。相変わらず美しさですね」

嬉しそうに口説き文句を口にした騎士に真奈は軽く目を細めた。

王妃さまと王さまと騎士 2

「何事ですか？」

騎士のことを華麗に流した真奈の視線が必死に俯いて顔を隠す風に残る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・（汗）」

ばれた？動かない視線に心臓が凍るような気持ちになる。

「・・・何をしていますか。貴女は」

（ばれた・・・・・・・・）

絶対零度の声に全ての望みが断たれたことを悟り風は絶望した。

「彼は君の知り合いかい」

「ええ。夜来の関係者です。彼が害のある人物でないことは保証しますわ^{たける}彪流殿」

「ふん。夜来の関係者、ね」

ドキッパリと言い切る真奈に彪流と呼ばれた騎士は納得したのかしてないのか微妙な反応だ。

顎に手を当て何か考え込んでいたが手をおろすと軽い、だけど内面

の読めない笑みで肩を竦めた。

「まあ、その彼が何かしたわけじゃないですしね。良いですよ。今回は愛おしい真奈殿の顔を立てて詮索はしません」

「おい、彪流・・・」

「何かしていたのは羽交い締めにして茂みに連れ込んでいた王の方ですしね」

「オオオイ！！たけるういきなり俺の品性疑われる発言をしてんじやねえ！」

苑王が至極当然の叫びをあげるが彪流は「あはは」と笑って流し。真奈は冷ややかな侮蔑の目を苑王に向ける。凧は苑王を憐れだとは思うが真奈と彪流を敵に回してまでフォローするほどの度胸はなかった。

「とにかく、コレは連れていきます」

真奈の言葉に凧は更にがっくりした。主を「コレ」呼ばわり。いくら正体をばらすわけにはいかないとは言え、あんまりな扱いである。

「どうぞ」

彪流も特に止めることなく送り出す。

真奈に無言で促され先に歩きだした彼女の背中を凧も追う。

「ちょっと待ってくれ」

苑王が何故か呼び止める。彼の視線の先は真奈。

……何故？

凧が首を傾げている間に苑王は真奈に近づくと少し戸惑うように視線をさ迷わせた後、覚悟を決めたように口を開いた。

「王妃は……どうしている？」

「……」

「へ？」

予想外の言葉に凧は思わず変な声を出してしまい、彪流が面白ろそうに吹き出した。彪流を横目で睨み付けてから苑王は真奈に視線を戻す。が。

真奈の冷徹な視線に曝され思わず顔を引き攣らせた。

凍りつく視線のまま真奈の口元が上がって凧の「ひっ！」という悲鳴が響く。

（わ、笑った。真奈が笑った！）

プルプルと震えながらじりじりと冷気を放出する真奈から距離を取る凧。

凧がどうにか安全な距離まで下がったのと同時に真奈の攻撃は開始された。

「まさか苑王様の口から凧さまのことについて聞かれるとは驚きました」

「妻のことを聞いて何が悪い」

「妻？ふふ・・・」

さも可笑しいと小さく笑い声をあげた真奈。だがすぐに笑いは消え、刃のような鋭さが浮かぶ。

「ふざけないで頂きたい」

「・・・・・・っ！」

「夫らしいことを何一つせずにむしろあの方を傷つけるだけなのに口だけの気遣いをみせますか」

「ちが・・・！」

「否定された所で風様が感じたことされたことそれが全てです。風様は強いし変な所で鈍くて普通ではありませんけどだからと言って心ない言葉に傷つかないわけではありません。・・・王の誕生日を祝う席に風様を出席させるように言われた時は期待もしましたが・・・持ち上げて落とすとはまた手の込んだ嫌がらせですこと」

どうやらあの祝いの席には風にも出席するように指示があったようだ。だから直前で来なくていいと知らせがあった時真奈はかなり不機嫌になったのだと風は納得した。

「ちょっと待て、あの時は・・・」

「言い訳など聞きたくありませんわ。貴方方苑の人間が風さまを拒絶するならすばいい。そんなことであの方は損なわれない。傷つ

けさせない」

強い強い意志を秘めた瞳が真っ直ぐに苑王を睨む。

「貴方が凧さまの伴侶だと決して認めない」

それだけ言うとは真奈は安心してゐる凧の腕を掴んでその場をあとにした。

王妃さまと王さまと騎士 2 (後書き)

苑王対真奈。結果は真奈圧勝でした。言い訳すらさせてもらえずばかり。

閑話 夜来の二人

真奈の仕える主は沢山のことに蓋をし耳を塞ぎ口を閉ざして生きている。

傷つけられても淡く笑い。与えられたものを大切にすることがそれらを奪われたり壊されても悲しそうに「仕方がないよ」と諦める。

決定的に彼女は己に価値を見出だせていない。

怒り執着などといった強い強い感情を己のために抱かない。

彼女の行動理念は己ではなくいつだって他者にある。

だから……。

「と言う訳で苑王の恋の懸け橋をしようと思うんだけど！」

あんなだけ馬鹿にされ邪険にされているにもかかわらずこんなことを言い出す。

「貴女はどこまで馬鹿なんですか」

「酷い！ どうせ別れちゃうなら気持ち良く後腐れないように幸せになっってくれた方がいいじゃない！」

「別れることは決定ですけどあんなだけ風様を馬鹿にした男を幸せにしてやることはありません。盛大に砂をかけてやりましょう」

「真奈っ」

二人とも別れること前提で話しを続ける。

風は国に帰されることはほぼ確実だろうなっ々と悟っていたし、

真奈はふざけんな。あんたらに凧さまはもったいなさ過ぎる！こっちから見切りを付けてやる！と離縁に乗り気満々であった。

「でも！」

「駄目なものは駄目・・・」

「折角見つけたネタなの！生で成り行きを観察して取材をし余す所なく妄想脚色し、小説にするの！売れば私たちの明日のご飯はオカズが一品増えるわ！」

凧の魂の叫びに真奈の動きが止まる。

おかず一品追加。

現状、王宮側から用意される食事は手抜きで質素で味が良くない。そしてたまに毒が入っていることがある。

お金があれば・・・おいしいご飯が食べられる。

「真奈・・・」

「凧さま・・・」

言葉はいらなかった。固く握りあった手が彼女達の答えだった。

余談だが・・・何にも強い執着を見せなかった凧がここ一年の食生活で食事に関してのみ向上心溢れ質上昇を求めるようになり彼女の

食に対する淡泊さを知っている者達を驚かせることになる。

王妃さまと少年達

寂しい

母はいつも泣いていた。

悔しい

父にとってたった一人の子供である自分に向ける視線は隠そうともしない無関心だった。

彼らにとっての僕は何？

もういない他の女性だけを想い続ける父を愛し、尽くし、たった一人の後継ぎまで成したのに父の愛を得るどころか関心すら向けられなかったため心を病んだ母と心から愛した女性を失い、愛してない女を妻として娶り、部下の言葉も聞かず全ての責務を放棄し始めた父の間に生まれた僕は……なに？

何度問い掛けても答は返ってこない。

たった一つわかることは父は自分を殺そうとしていることだけ。

無関心だった父が何故自分を殺そうとするのかわからない。だが父にとつての「子供」は自分ではなく最愛の女性と共に天にはかなく消えた命だけなのだろう。だから血を分けた我が子でもたやすく殺せる。

『……様！大丈夫ですか！』

手を引いて先導してくれていたたった一人の味方である少年がこちらを振り返る。僕より二歳だけ年上なのに彼は全力で僕を守ろうと

していた。

それが申し訳なくてだけど繋いだ手は離せなくて・・・僕はただ助けを祈っていた。

暗い暗い夜の森を走る。すぐそばに近づく『死』を感じながら僕は走り続けた。

夜明けは遠く、朝はみえなかった。

麗らかな午後。例によってネタに詰まった風は気分転換に中庭を散歩していた。

（ふふふ。同じ鉄は踏まない。今日は主立った側室候補達を集めたお茶会があることを確認してるから遭遇する確率は低い！）

チラリと物陰から覗いた所、にこやかな笑みと着飾った美しい女性達と厭味が飛び交ってました。正しい女の戦場でした。ネタには出来ませんが正直風ですら近寄りたくないどす黒い何かがあの場合には渦巻いてました。

（あの空気は私の今の力じゃ表現しきれない！っ！未熟さを感じるわ！）

あの陰湿さや空気、隙を見せれば喰われる弱肉強食なくせに外見だけはうっとりするほど絵になって・・・駄目だ。表現しきれない！

色々文章を考えながら歩いていると見覚えのない場所に出た。

「あちゃ・・・文章考えるのに夢中になりすぎた」

踵返しかけた風は意外な人物の姿を見つけ目を丸くする。ここにい

るはずのない人。「お飾りの王妃」を嫌い、利用するため彼は後宮に近寄らないのだから。

風に舞う銀の髪。まるで風が来るのを知っていたかのように苑王は風の前にいた。幻のように美しい男だ。現実には存在していることが信じられない。

「・・・久しいな」

幻は風の姿を認めると口を開いた。

突然のことにぱかんと苑王を見上げてしまう。三度目の顔合わせ。

一度目は結婚式。二度目は姿を偽った月夜の夜。

そして今、太陽の下で苑王に風は三度目の出会いを果たした。

王妃さまと少年達 2 (改) (前書き)

遅くなつてすみません！

王妃さまと少年達 2（改）

結婚してから一年。一度も顔をあわそうとしなかった夫が目の前にいた。

驚く凧に対して彼の顔に驚きはない。まるで全てを見透かすような目で凧を見ていた。

「苑王？」

「・・・・・・・・」

悲しそうな顔。

「そなたは、私を嫌い疎んでいるのだろうか」

静かに彼は語った。凧は首を傾げる。内容にも彼の口調と一人称にも。その言葉は凧が言うべき言葉だと思うのだが

「それでも仕方がないことをしているがな」

暗殺とか食事に毒を混入されていることや一度たりとも凧の元を訪れていないこととか軽んじた態度のことを言っているのだろう。まあ、凧は・・・・・・・・と言うか夜来の王族は体質的に毒の効きにくい上に幼少期から徹底的に毒や暗殺について学ばされるから適切に対応できているのだが。

目の前の人が凧の安全について何を思い、何をしたのか知らない。だけど一年ここで暮らした。情報も集めた。見聞きした全てで予想し確信したいいくつかの実情と王を取り巻く様々な疑惑。

真奈は「同情の余地なし。さっさと捨てましょう。あんな男」と凧の夫に足りないと思切ったようだが凧はまた違う見解を持っていた。だから話しをしようと思う。目の前に立つこの人と。

「失礼ですけど今の苑王は王宮の全てを掌握されてないのではないですか？」

「・・・・・・・・」

凧の言葉に彼は答えない。構わず凧は続けた。

「前王の残したものは根深い、危険を承知で夜来の姫を娶り後ろ盾を得なくてはいけないぐらいに」

そして、その姫を囚にしなければならぬぐらいに。

「・・・・・・・・」

「父のことです。渋りはしたでしょうが苑が腐れ、荒れれば夜来にも影響があると考えたはずです」

苑ほどの大国が荒れれば周辺への影響も計り知れない。実際、ぐちゃぐちゃになった前王の治世後半は苑から逃げ出した難民の受け入れやら滞った流通で夜来も対応に追われていた。子煩悩であるし過保護だとも思う。だが父は親である前に王だ。国を民を守ることを優先する。そして、凧も王族の一員、民のために生かされている自覚はある。

「夜来は苑と肩を並べる大国。私達の婚姻の意味は貴方が夜来の後

ろ盾を持つことを国内外に知らしめること」

下手なことをすれば夜来を敵に回すと反乱分子に宣言した。そして
凧は彼らにとって目の上のたんこぶと認識された。

「この一年、この国で様々なことを見聞きし、感じました。苑王、
貴方が父と何を企んでいるのかは知りません。だが、その何かに「
私」は大きく関わっている。違いますか？」

「……………」

苑王は答えない。ただ静かに凧を見ている。

凧は真っ直ぐ、王を見つめた。

「……………今、貴方が一番守るべきものは何なのですか？」

凧の言葉に苑王は迷いなく答える。

「この土地に住む全ての民だ」

強い決意の眼差しにゆっくりと凧は笑った。

「なら、私も守ります。この土地に住む全ての民を。だから」

凧の笑みに決意が混じる。

「だから、王の企みに乗りましょう。全てが終わるまで、私は逃げ
ませんし殺されません。王妃としてこの土地のために生きましょう」

囧になれというのなら最高の囧になろう。

「夜来の王女」がもつ影響力を最大限利用しよう。

夫としては最悪かもしれないが迷いなく民を一番に守ると答えたこの男はきつと民にとって良い王となる。

この国を覆う全ての憂いをなくしてみせよう。

お飾りの王妃が民に返せることなんてきつとそれぐらいしかない。

凧の決意の笑みに苑王はしばし魅入られたように己の王妃を見つめた。そして、彼が吸い寄せられるように手を伸ばしたその瞬間、大地が激しく鳴動した。

「きゃ！」

立ってられないほどの揺れに地面に尻餅をついてしまう。

世界が揺れてる。全ての反抗を許さない大きな力に凧の心に恐怖感が生まれた。

「大丈夫か！」

苑王の声に頷くのが精一杯だ。

その鳴動が始まりを告げるものだったと知るものは少ない。

王妃さまと少年達 3

走っても走っても夜の終わりが見えない。

怖い……闇の中から静かに僕の命を狩ろうとする刃が。

「……………っ！危ない！」

空気を鋭く裂く音、回る視点、そして守るように回された腕と……
・顔にかかった生暖かい感触。

「……………え？」

「無事、ですか……」

どうして……………。

「よかった……怪我はないですね……」

なんで……………。呆然と痛みで歪み、それでも笑う幼なじみにを見つめた。

「……………！」

僕は震える手で僕をかばい暗殺者に背中をきられて今にもたおれそうなくせにそれでも僕のことを心配する大切な幼なじみの体をささえる。

そんな僕達に暗殺者はゆっくりと血に濡れた刃を僕達に向ける。幼なじみが僕を庇おうとする。反射的に僕は彼の腕から抜け出し暗殺

者の前に立ち塞がる。

幼なじみが狂ったように叫ぶのが遠くから聞こえた。刃が光もないのにキラリと光った。

目を開き僕は僕の命を奪う存在をただ睨み付けた。僕に許されるたった一つの反抗だった。

「やめろ！その方を殺さないでください！！」

幼なじみの悲痛な叫びにも刃は止まらず、僕の体に届くその瞬間。

「「！？」」

世界が揺れた。大地が鳴動し空気が揺れる。怒りを体言したような揺れにただびとである人はただ無力に怒りが通り過ぎるのを待つしかなかった。

体感したことのない揺れはほんの十秒ぐらいだったというのに風には永遠続くかのように感じられた。

体の奥の奥。自分でも把握出来ない何かがざわめいているようで落ち着かない。苑王は静かに虚空に目をやり、微かに目を細めた。

「い、今は・・・」

図太い風も流石に腰を抜かしたのか地面に座り込んだまま、せわしなく視線をさ迷わしていた。

「・・・・・・・・」

できない！と騒ぐ風に偉大なる始祖王もそんなことで顔向けできないと言われても困るだろうと心の中で苑王は突っ込んだ。

王妃さまと少年達 4

「あゝもう！私の馬鹿〜〜〜〜！」

ブチブチ草を抜きながら凧は盛大に喚いた。

「なんであそこで目をつぶっちゃうかな〜〜！もう！」

抜いた草をポイポイ投げながら愚痴りに愚痴る王妃を王は何とも言えない複雑な表情で見守る。

「せっかくの機会だったのにな、勿体な・・・あ、」

そこで漸く苑王の存在を思い出した凧の顔が珍しく固まる。

嫁いだから被り続けた猫はすでになく、地の言動が出ていた。

ちなみに、凧が本性である図太く逞しい根性を隠して気弱で口答えのできない卑屈な性格を演じる理由は結婚当初はこのほうが反抗するよりかは被害は少ないだろう、という経験談と情報収集のため。小説を書き始めてからはそれに加え、ネタ集めのためだったりする。

直接会話が殆どなかった苑王でも王妃の性格ぐらいいは噂で聞いているだろう。

どんな悪評にも「ネタが〜」と叫びながら草を抜くなどというもの

はない。

無言で見つめ合う妻と夫。

「・・・・・・・・えへ？」

可愛く小首など傾げ、笑ってごまかそうとしたら何故だか目を剥かれ、凝視された。

その顔は相手の非常に似合わない言動に戦い（おののい）ていた。

苑王とはそんな顔をされるほど、親しい交流は皆無なのだが？

（はて？ 会話回数一桁の私たちのどこにこんな顔をされる要素が？）

疑問に首を傾げた風の黒髪がふわりと背後から吹いた風に靡く。
思わず身震いしそうになるぐらい冷たい風はまるで冬の空気のように風には感じられた。

（・・・・・・・・え？）

振り向くとそこに夜があった。

空間の一角を切り取ったようにうらかな庭に夜の深い森があった。
異質な光景に絶句する風の頬を切り取られた空間から吹いてくる冷たい風がなでていく。

（な、なに？ これ？ 魔術？）

双子の妹がよく変な魔術実験を行っては様々な怪現象を引き起こしていたのを思い出した。

これもその類のもの？

そう思って目を凝らした凧だったが異質の空間側に人影があるのに気付いた。

小さな影が二つに黒い大人の姿。

小さな影は膝をつきながらも地面に倒れたもう一人を庇うように黒づくめを睨んでいた。

男はゆっくりと剣を振りかぶる！

「ちょ！！子供に何をしてるか～～～！」

男が子供を殺そうとしていると認識したと同時に凧は走り出していた。

異質な状況も自分に害が及ぶ恐怖も忘れて、凧は扉の大きさに切り取られた空間に迷いなく飛び込んだ。

王妃さまと少年達 5

大地の揺れはほんの数秒だった。

僕が体制を立て直すよりも早く暗殺者が剣を構え直す。僕は背後の幼なじみを守るために必死に暗殺者を睨みつけた。

くっ・・・せめて・・・せめてコイツだけでも助けないと！

そう、思った時だった。

優しい風が吹いた。冬の時期に吹くはずのない暖かい風はまるで僕らを元氣つけるように頬を撫でた。

(え・・・)

そして風に導かれるように光りが・・・暗く淀んでしまった夜を引き裂くように差し込む。

待ち望んだ光に自然に視線が引き寄せられた。

光の中に浮かぶ小柄な人影。黒い瞳にを目一杯開き、僕らを見る少女は状況を理解するやガラリと表情を変えた。

「ちょー！！子供になにしてるか～～～！」

少女の喉から発声されたとは思えないほどドスのきいた怒声が空気を震わせる。

光を背負い物凄い勢いでこちらに走ってくる少女の姿。

その人から僕は目をはなせなかった。

怒りのまま走り出した風に少年達も暗殺者も一瞬動きを止めたがさすがはプロ。すぐに意識を本来の目的に戻すと今だに風を見ていた少年に剣を振り下ろす。

風の顔が怒りと焦りで更に赤くなる。止めなければと思った時にはもう、彼女の手には武器が握られていた。

「インク投下（開封済み）！とりゃあ！！！」

懷から取り出したインク瓶を走りながら風が全力で暗殺者に投げ付ける。

雄叫びは多分、本人なにも考えてはいない。

暗殺者は冷静に飛んできたインク瓶を打ち払う。が、その途端、真っ黒な液体が広がり暗殺者の視界を塗り潰した。

「……………っ！！」

「この！児童虐待現行犯！！」

物凄い速さで距離を詰めた風のスカートが少年の目の前で翻る。

白い脚を恥ずかしげもなく曝しながらインクで視界を奪われた暗殺者の腹に強烈に蹴りを喰らわせた。

「子供を殺そうなんて男の……いえ、人間の風上にも置けない最低行為よ！！恥を知らないさい！恥を！」

少年達を庇うように暗殺者を指差し、説教をかます風。

インクを投げ付けられた揚句、かなり痛烈な一撃を喰らった暗殺者は苦しげに呻くしかないようだ。

王妃さまと少年達 6

倒れた暗殺者など目もくれずに凧はものすごい勢いで少年達を振り向いた。

「きみたち、大丈夫・・・って血！怪我！手当てしなきゃ！布・・・紙しかない！・・・服破ればいいか！あ、君止血するから手伝って！」

怪我人がいてさらに慌てつつも、とにかく手当て！と凧は怪我をした少年の具合を確かめつつ、もう一人の少年に指示を飛ばした。迷いもなく服を破り、即席の包帯を作る凧の意識は完全に治療に集中しており、背後で暗殺者がゆらりと起き上がったことに気付かなかった。

「！危ない！？」

怪我をしていない少年が真っ先に気付き叫ぶ。背後で膨れあがる殺気に大地を蹴る音。
振り向くよりも考えるよりも早く凧の身体は少年達を守るために動いていた。

「やめろ！」

幼い悲鳴じみた声が響く中、暗殺者が凶刃を凧に振り下ろした。

襲いくる痛みと死を予感して凧はきつく瞳を閉じた。

遠くで風が唸る音を聞いた気がした。

王妃さまと少年達 7 (前書き)

すいません！短いです。

王妃さまと少年達 7

凶刃が迷いなく風の華奢な身体を切り裂く、その瞬間。

風が唸りをあげる。全てを薙ぎ払うような風がまるで意思をもった一つの獣のように地を疾走し、暗殺者に向かう。

ブワッ！と突風に風の黒髪が舞った。

抗うことすらできない力に暗殺者は弾き飛ばされ樹の幹に激突し、そのまま座りこんだ。

魔力によって生み出された風がまるで護るように風達を包み込む。先程の攻撃が嘘のように穏やかな風に最初は怯えた様子だった少年達も安心したように身体の手を抜いた。魔力のない風でも感じられる強い力を秘めた風を作りだせる人間なんてこの苑に一人しかいない。

なのに風は咄嗟に有り得ないと思った。国の利害や風自身の立場など色んな理由で彼が風を見殺しにできないことは理解していた。

でも、疎まれたお飾りの王妃をこの人が助けるはずがない、と反射的に考えた。

苑王が関心もない。王妃である妻を助けるなんて。

理性が理屈をこねても心が納得してなかった。

王妃さまと少年達 7 (後書き)

本来なら一つだった話を二つにしてしまったためこんな短さに……。しかも苑王は助けにきたのに風は「有り得ない」と心の中でバツサリ切って捨ててるし。

閑話／＼夜来の姫の憂鬱／＼

人には分というものがある。身の丈に合ったもので満足すべきだ。

だから。

美形優秀万能……不可能？困難？なにそれ、道を塞ぐものがあるなら粉碎すればいいんじゃない？を素でやらかす家族と血が繋がりながらも地味、平凡、落ちこぼれ、道を塞ぐものがあつたらとりあえず地道にそれを退かす努力をするしかないんです。な風は取り敢えず、自分の姿絵の一つも相手に送ってなかったらしい父と夜来の王女Ⅱ絶世の美女と思い込んだ苑の婚礼衣装担当者に内心毒づいた。

今、風の目の前には沈痛な顔の女官といつもの無表情に青筋を浮かべ背後に黒いオーラを纏い苑側に説明を求む真奈と場に爆弾を落としたそれが鎮座している。

純潔を現す白いドレスは時間とお金と技術の掛けられた最高級品。息をのむほど繊細な刺繍を施し、砕いだ真珠のビースが裾に縫い付けてある。

綺麗だ。見事としか言いようのない豪華で美麗な花嫁衣装だ。

着る人間をおもいっきり選ぶけど。

そして悲しいかな、風はおもいっきりこの衣装に弾かれた。

いや、あの、その、と口ごもる相手を冷静に言葉で追い詰める真奈を横目で見ながら風は小さくため息をついた。

結局、王家の婚儀に相応しい替わりの婚礼衣装などみつかるはずもない、が、凧に似合わない婚礼衣装など着せてなるものかと真奈が執念で衣装に手を加えてくれて挑んだ結婚式。

美しい花婿の隣に並ぶ似合わないドレス姿の花嫁。

落胆と嘲りを感じながらも凧は最後まで顔をあげつつつけた。

このドレスは真奈が寝ずに手を加えてくれたことで最初の時と比べ、驚くほど改良されているのだ。

真奈のがんばりを思えば顔なんて俯けない。

このドレスが恥ずかしいなんて思わない。

与えられた中で盛大に頑張った結果を笑われることは不愉快だが卑屈になんてならない。

だから、凧は堂々と苑王との結婚を誓った。

落胆と嘲りの中でも真っ直ぐに顔あげ、一度たりとも俯かなかった夜来の王女に「なにか」を感じた者は何人かいた。

心ない者達が「ハズレを引かされた」と囁く中で彼女に可能性を見出した人々がたしかに、いた。

そのことに彼女が気付くのも、彼女の「可能性」が表に現れるのもかなりの時間を待たなければならなかった。

閑話〜夜来の姫の憂鬱〜（後書き）

本編が煮詰まっています。一息つくための閑話です。……書いてて思いましたが凧は本当に最初からろくな目に合ってませんね……私が言うなという感じですが……。

飄々として図太くて、ネタ探しに余念がない凧ですが彼女が内に抱える感情は結構、複雑です。

その複雑さ故に私も煮詰まってしまったのですが。

この「王妃様の副業」自体が数話で終わる短編のコメディー予定の話だったので（最初の方に少し名残があります）が書いている内に「この王妃様はどうしてここまで疎まれてるんだろ？」と思い、設定が広がり、凧という人物のただ飄々として図太いだけでない内面が見えてきて背景や世界観も出来上がり……結果、長くなってしまうしました。

矛盾や人物の心理描写がうまくいかない文章レイアウトが変など読みづらい所が沢山ありますし、これからもでてくると思います。時間には掛かりますが直していきますのでそれでよければ読んでいただけると、とても嬉しいです。

長文失礼しました。

王妃さまと少年達 8

風が名残を惜しむように彼の周囲を包んでいた。

風を従わせ、現れた苑王の姿に少年達は風の腕の中でただただ目を奪われていた。

圧倒的な力と覇気は苑王とは知らない少年達ですら彼がただ者ではないと悟らせる。

苑王に意識を奪われていた少年達は風がほんの一瞬だけ身体を強張らせたことに気がつかなかった。

「怪我は？」

「……………」

「…………王妃？」

「……………はっ！」

呆然としていた風の目に光りが戻る。

目の前にいる苑王の姿に戸惑ったように腕の中にいる少年達を抱きしめた。

迷うような表情のまま何かを言いかけた風を遮るように苦しげな呻きが聞こえ、苑王が前に出た。

鋭い視線の先は大木を支えに立ち上がった暗殺者の姿があり、風と少年達に再び緊張が走る。

だが、予想したような攻撃は全く来ない。

暗殺者は何故だか驚愕したように苑王を凝視した。

「な……ぜ……」

声が掠れていたのはダメージのせいではないようだ。

「何故、苑王が……貴方がその子供を庇う？」

信じられないことを隠しもしない暗殺者に苑王は何も答えない。

「……………と言ったのは……………貴方、だろ？」

苦しい息切れのせいで暗殺者の言葉がよく聞き取れない。

だが苑王には届いたのだろう。

ほんの少しだけ肩が震えるのを凧は見た。

しばし、誰もが言葉を失った。凧は腕の中にいる少年達を守るように抱きしめながら苑王の背中を見つめた。

暗殺者ははっきりと苑王の顔を知っていた。

顔見知り……のように感じられた。しかも、この場で絶対に会うことのない人物に会ったような驚愕だった。

一体、何が起きているの？

凧の内心の疑問に答える声はなかった。

王妃様と少年達 9

息が詰まるほどの緊張感に凧は瞬きすらできなかった。

ただ苑王の背中を見つめるしかない。

何が始まっているのか・・・あるいはこれから起きるのか・・・自分の把握しきれない流れに抗うように凧は苑王の背中を睨むように見た。

何もわからない。だけど・・・守るべき命が二つ、彼女の腕の中にはあった。

凧は己に対する評価は底辺だが自分を省みない代わりに他者を最優先させる。守るべきものが場合、何が何でもそちらを守る。

暗殺者が咳込みながらもなんとか体制を立て直す。驚きが残る顔をしていた彼に刹那冷たい何かがよくいった。それが何を意味するのか凧が考えるよりも先に。

「……………」

ブワツと巻き起こった風が死角から少年に向かって放たれたナイフを防ぐ。

「増援か」

苑王の言葉に先程とは違う緊張感が凧たちに走る。

辺りを窺う苑王の目は鋭い。

「王妃、怪我をした方の子供を背負え。……………合図したら風で後押

しするから空間の亀裂に向かって走れ」

苑王の言葉が終わるよりも早く風は背中に負傷した少年を背負うともう一人の少年の手を握る。

強くなる緊張感に少年達の身体が強張ったのがわかった風は安心させるように少年達に笑いかけた。

「大丈夫だよ。……絶対を守るから」

我ながら震えた声でもはつきりと言い切る。不安にさせないように笑顔は絶やさない。

ぎゅうとすがるように握り返された手。強くなった腕。それらを感じながら風はその時を待った。

「走れ！」

苑王の合図と共に闇から数人の暗殺者が飛び出してくる。それを阻むように苑王が起こした風が彼らの足をさえぎる。

後ろも振り向かず風たちは走り出した。

風達を押し出すように風が吹く。自身が出せる以上の速度で走らせる。手を繋いでいる少年の足などほぼ地面から浮いていた。

全力で走る。闇を切り裂くような光に向かってただひたすらに！

時折聞こえてくる音は苑王が作り出した風に敵が何らかの攻撃をしかけた音だろう。振り向く余裕のない風には確かめようがないが。

光が近づく。あと少し、あと十歩。

一際強い風が風達を加速させる。風達はほとんど転がるように空間の裂け目に飛び込んだ。

背中の少年を庇おうとした結果。風は顔面から地面にダイブした。

「ぐはぁ！」

とてもじゃないが女性らしからぬ悲鳴を上げながらそれでも背中の少年を庇った風。

「だ、だいじょうぶか？」

手を繋いでいた方の少年がおろおろと風の様子を窺いながら怪我をした少年が風の上からどけるのを手伝う。

「いたた……」と言いつつ起き上がった風は赤くなった鼻をさすりながら少年達の無事を確かめる。

「大丈夫？」

「いや、それはどちらかといえば僕達の台詞なのは」

思わず突っ込みを入れてしまう少年達だった。

「苑王は……」

きょろりと辺りを見渡した風は空間の向こう側で敵を抑えている苑王の姿と揺らぎ始め収縮していく空間の割れ目を見つけて目を見開いた。

「え、あ、ちょっ！苑王！！早くこっち！閉じる！！」

全力で割れ目に近づき苑王に大声で伝える。風の声に気づいた苑王が風を起こし暗殺者をぶっ飛ばすと風に向かって走り出す。

「はやくはやく！！閉じちゃう！！」

そう遠くにいるわけではないが明らかに割れ目が小さくなっている。今はもう子供が通れるぐらいまでに小さくなっていた。

風は手を振り回し馬鹿のひとつ覚えのように「早く！」と繰り返していた。

苑王は風を使っているので常人より早い速度でこちらに向かってはいるが彼は敵がこちらにこようとするのを邪魔している分だけ足をとられてしまう。

「早く！ってああ、また小さくなったあ！」

ぐんっと小さくなる割れ目に風の内心はもう、穏やかではない。

「苑王~~~~急いでください~~~~！」

手で止めようにも触れないのではどうしようもない。あわあわと見ているしかない。

「はやく！……っ！」

その時、風は見た。苑王に向かってナイフを放とうとする暗殺者の姿が。ぐんっとさらに割れ目が小さくなる。風に迷いは、なかった。

「苑王！頭を低くして飛び込んでください！」

「……………」

凧の言葉に反射的に頭を下げた苑王。

「インク投下第二弾　！（予備）」

懐から再び取り出したインクボトルで見事な投球第二弾を披露した凧の手から離れたインクボトルが苑王の頭の上を通り過ぎ今まさに攻撃を加えようとしていた暗殺者に命中した。

「ぐはぁ！」

苑王が一気にスピードをあげた。

「苑王！」

凧の伸ばした手が苑王の腕を掴む。思いつきり引っ張って再び転がるように中庭に苑王が飛び込んだその瞬間、割れ目が一気に収縮し、そして夜の森が消え去った。

断章？

「……はあ~~~~？」

あきれ返ったような子供の声に軍人は楽しげに笑って子供の頭に手を置いた。

二十歳すぎと思われる軍人と十を少し越えたあたりに見える子供は一見接点がなさそうに見えるが纏う空気は兄弟のようなほほえまさがあつた。

軍人はある「異変」を解決すべく派遣された一般人にとっては別世界の人間と認識される存在であり、子供はこのご時勢よくある浮浪児と呼ばれる存在であつた。

そんな二人がなぜ、瓦礫に腰をかけ、親しげに話しているのかはたから見ている限りではわからなかった。

「……ガキ扱いすんなよ！　っうかあんた何言つてんだよ！　意味わかんねえ~~~~！」

ぽんぽん叩いてくる手を思い切り振り払いながら睨みつければ軍人は黙っていれば夢のように美しい顔に人のよさそうな表情を浮かべながらあごに手をやる。そんなに不思議がらなくてもいいだろうと言う軍人が子供に言ったのは「私の名前を考えてくれ」だ。

意味が分からないという自分の言い分は至極当然だと彼は主張したい。

「何なんだ。あんたちゃんと上から名前をもらってんだろ？　なんでいきなり俺に名前をつけろなんて言い出すんだよ」

「上からもらった名前なぞ気色が悪くて気に喰わない」

「じゃあ自分で勝手に考えて名乗れよ！」

「あいにくと名づけのセンスには恵まれていなくてなあ。子供の頃、羊に「羽毛」と名づけたら即却下された」

ああ言えばこう言う。しかも聞いてもない過去まで勝手にべらべら暴露しやがるし。

頭が痛い眉間を指で解す子供に何を勘違いしたのか軍人はポンと手を叩いた。

「ただ一方的に名前を考えてもらうのも悪いな。よし！お前の名前を私が考えよう。だからお前は私の名前を考えろ。うむ。いい考えた。相互交換という奴だな！」

何を言っているんだこの軍人は。子供は目の前の能天気の本気で自分と同じ人間か疑った。

「っうか。ちょっと待て。俺には名前はあるしなかったとしても羊に「羽毛」とか名づける奴に名前なんて付けてもらいたくないしそもそも前提条件として俺はお前の名前なんて考えたくない！」

「おおすごいぞ。息継ぎなしの長せりふを見事言い切ったな！」

「まずは俺の拒否を聞いてくれ！頼むから！」

「相変わらず元気な子供だなあ。あはは！おっと、時間だな。それ

じゃあ次に逢うまでには考えておいてくれ。私もっておきのものを考えてこよう！楽しみにしていてくれ！」

黄色い頭だからプリンなどだろうか？などど不吉極まりない眩きを残しながら軽やかに去っていく軍人に子供は身体中から血の気が引いた気がした。

「おい！俺は考えないぞ！っうか考えないでくれ！プリンてなんだよ！人名じゃねえだろそれ！」

子供の叫びに軍人はヒラヒラと振り返ることなく手を振って応えた。

「ぜ〜〜〜つたいに考えないからなあ！」

悔し紛れの怒声は蒼空に吸い込まれた。

遠い遠い過ぎ去った日々の中で二つの名が生まれた。

刹那の会合になるはずだった二人は互いに名を与え、別れ、再会し、そして共に戦場を駆けることになる。

不良医師登場

それは始まりと終わり、死と生を内包した場所。

「おやおや、珍しいお客様ですねえ……」

驚いたようなそれでいて間延びした声に漂っていた意識が急速に覚醒し、来訪者は目を、開けた。

闇とも光とも付かないあいまいな空間の中を陽炎のような塊がいくつも飛んでいた。それらは砕け、欠片になりそして欠片同士がくっつき新たな光となり、漂い、あるものはいずこかへと消えていき、そうでないものは再び砕けて欠片になり他の欠片とくっつくを繰り返していた。

ゆっくりとゆっくりと意識にかかった靄が晴れてくる。その瞳に力が戻るのを少年の姿をした存在は面白そうに口元を歪ませた。

「ようこそ。希なる来訪者さん。さあ、君の話聞かせてください」

何一つ変わらない世界に訪れた一つの変化を少年は芝居かかった仕草で迎えた。

城の一角にある騎士団専用の医務室。その主である若い医師は掃除にきていた前から目をつけていた侍女の娘を後ろから抱き寄せ、その柔らかな身体を腕に閉じ込めた。

「楼^{ろう}さま、お掃除ができません、だめですよ」

建前上は拒否するような言葉を吐きながらも侍女は一切の抵抗を見せない。楼と呼ばれた医師はにやにや笑いながら形のよい耳に舌を這わす。

「あっ……！」

びくんっ！と震える侍女の身体をそのままベットに押し倒そうと……。

「勤務中に盛るなど何度言わせれば理解するのだ。お前は」

押し倒そうとしたが魔術で部屋に飛んできた主がそのまま容赦なく蹴り飛ばしたことによって己が床に蹴り倒される羽目になった。

「ぎゃふん！」

一応美形に入る楼がまるっきり三枚目のような叫び声を上げた。

「ひゃ！あ、へ、陛下！」

「……………仕事に戻れ」

苑王の姿に慌てふためく侍女に苑王は冷たく一瞥すると一言言い放った。

侍女は慌てて一礼をするとそのままバタバタと部屋を飛び出していった。

「あ~~~~~！！ひどいっすよ！王様！せっかくいい感じにも

ってこれたのに!!ぐえ!!」

楼の抗議など知らぬ存ぜぬでわめく部下の背に容赦なく踏みつけて黙らせる苑王。

「楼、けが人だ」

「僕の方がけが人になりそうですよ!主君と仰ぐ人のせいでね!
!って、へ?けが人?」

その言葉に苑王の腕の中に血まみれの子供の姿を見つけた楼の顔が医者のに変わる。

それを確かめてから足をどけた苑王は診察台に少年を寝かせた。

「これは……また、物騒な傷跡ですね……曲者でも入り込みましたか?というかこの子供は?」

「詮索は後だ。治療しろ」

「ごもつとも」

軽口を叩きながらも楼の手はてきぱきと動く。

「っう!」

「はいはい。我慢我慢。男の子だからね。痛いけど痛くて熱くて苦しいだろうけど我慢しろ」

少年が痛みでうめき声を上げようが全く手を緩めることなく容赦なく治療していく楼。彼は患者が女性の場合はこれでもかというぐ

らい痛みや苦しみなどに対して配慮するが相手がこと、男性の場合に限りよほどの理由がないと配慮をしない。

そして騎士団付きの医師である彼の患者はほぼ男が占めているため、彼の治療は鬼畜だともっぱらの噂であった。

「はい、終了〜〜〜！幸い毒は使われてないようですから変な後遺症もないですよ」

治療を終えて笑顔で振り向く楼に苑王は頷き、その傍にいた凧ともう一人の少年が安堵のため息をついた。

「「よかったあ」」

仲良く声をそろえて少年の無事を喜ぶ王妃と子供。にこにこにっこり。ほのぼのとした空気があたりを包んだ。

「あはは。僕の腕は大陸一ですよ。王妃様も何かあったら後宮付きのあのいけ好かない無表情女医なんかより僕の方に……………」

そこまで言って楼は異常に気づく。高速で振り返ると良かった良かった少年と話をしている凧の姿をがん見する。

「あれ？おかしいな？なんか、王妃様のそっくりさんがいる」

あははと空笑いを上げる楼に追い討ちをかけるように苑王が決定打を放った。

「王妃。けが人がいるのだ静かにしろ」

「あ、はい。すいません。苑王」

状況確認（前書き）

すいません！遅くなりました！

状況確認

「どういふことですか？」

夕暮れ、見知らぬ少年を連れて部屋に帰ってきた凧に無表情にだがはつきりとそう真奈は言い切った。

真奈の前には床に正座させられた苑の王妃と彼女に助けられた少年。部屋に入り、真奈の姿を見つけるなり無理やり正座させられ少年の顔は不機嫌そのもので自主的に正座した王妃の顔には脂汗がびっしり流れていた。

「この子、保護することになったんだ。つきましてはしばらくここで一緒に暮らすことになりました……」ともごもごと説明する凧に真奈の眉がぴくんと危険な角度に跳ね上がった。

「一体何がどうなってその少年を凧さまが保護することになったのですか」

声を荒げているわけではないのに淡々とした物言いなのに何故だか尋問されている気がしてくるのはどうしてなのだろう。

「えっと、ですね……話せば長いのですが……」

「簡潔に」

「はい！了解しました！真奈さま！」

新兵のように背筋を伸ばし敬礼をする凧。

迫力に負けて侍女に敬語、さま付けの王妃様。

威厳、なし。

一連の流れを見ていた少年の瞳がだんだん胡乱なものをみるような目になってきた。

「……………」

あんた、王妃だろ？という目で見てくる少年は無視して風は事の起こりを説明し始めた。

苑王により黙らされた楼。彼を囲むように少年と風が恐る恐る近寄る。

「えっと……………ピクリとも動かないのですがいいのですか？」

「痙攣すらしてないぞ。息、しているのか？こいつ」

しゃがみ込み、息さえ感じられない死体のような楼を覗き込む風と少年。少年などはつんつんと近くにあった物差しで突いている。

頭に特大のタンコブをこさえてピクリとも動かない楼を心配する二人をよそに張本人はいたって冷静だった。

「気にするな」

素っ気無く言い放つ苑王を思わず二人は凝視してしまう。

「……………」

それは息をしてなくても別に気にする必要はないということか？それとも生きているから大丈夫という意味なのか？どっち？どっちなの？

内心の疑問は苑王の迫力により口に出すことはできなかった。

以上が床に倒れた楼を囲んでの三人の会話であった。（一人治療が終わった後のため眠りにについている）

楼の当たり前といえは当たり前すぎる叫びを力技で黙らせた苑王は床の物体は無視することにしたらしく手近な椅子に座るように二人に勧め、自らも座る。

凧と少年は顔を見合わせ、床に伸びている物体を見て、苑王を見てそして大人しく椅子に座った。

ここにきてようやく落ち着けることができたなあ。と考えていると苑王が少年の方に視線を向ける。それに気づいた少年が少し緊張したように苑王を見つめ返した。

「疲れているとは思いますがこちらの質問に答えてもらおう」

有無を言わさない苑王の言葉に凧は隣の少年の緊張が増すのが分かった。心細いだろうに唇をかみ締めて必死にそれを押さえ込んでいる少年を励ますように凧は少年の手を握った。

はっとしたように見上げてきた少年は少し戸惑ったようだったが握られた手を振りはらわれることはなく再び苑王を見つめたときに強く握り返された。

苑王の眉が一瞬ぴくりと跳ね上がったが二人が気づくことはなかった。

「お前がいた森と城の中庭が繋がっていたのは何故だ？ どうしてお前は襲われていた。…………お前は何者だ？」

苑王と少年の瞳が合わさる。

「僕は……………」

戸惑うように瞳を揺らしながらそれでも口を開こうとした少年だったが不意に何かに気づいたように言葉を詰まらせた。

「ぼく、は……………」

何かを探るように視線をさ迷わせ頭に手を当てる。

「？ どうしたの？」

少年の異変に風が声をかける。ぼうとした表情で少年が縋るように繋いだ手にもう一方の手を重ねた。

「気分が悪いの？ それとも貴方もどこか怪我を？」

「違う…………僕、僕は……………」

空気を求めるように口を開閉させる。繋いだ手を益々強く握り返してくる少年の顔から血の気が引いていた。

尋常でない様子に風が立ち上がるようにするよりも早く少年がぽつりと呟いた。

「なにも、おもいだせない。僕は、一体、だれ、なんだ？」

その言葉に風は目を大きく見開きそして苑王はただ静かに息を吐いた。

状況把握

「記憶が、ない」

呆然とそう呟く少年の言葉に凧はしばし、同じように呆然とし、そして。

「い、医者！！お医者さまを呼ばないと！！」

いきなり混乱の極地に到達した。作家魂からかなのかネタ帳はしつかりと手にしており、矢継ぎ早に出た言葉には取材めいたものも混じっていた。

「痛みは！ケガは！頭痛、吐き気などの異常は！気分はどう？感想は………ってこんな不謹慎なこときいたらだめえ！！作家の本能がにくいいいいい！！医者は！！城のなかにお医者さまはいらっしゃいませんか！」

ワタワタワタタタアと面白い動きで手を振り回し医者と呼ぶ凧に床に伸びていた男の目がかっ！と見開いたため、側にいた少年がびっく！と身を震わせた。

「はっ！！女の子が僕を呼んでいる！！」

恐ろしき女好き。女の子の声で呼べば火の中水の中。再起不能からも蘇ってくる。

面白い動きをする凧をロックオン！正しく獲物を狙う猛禽の目で凧を捉えた。

「僕をお呼びですか！貴女の心のお医者様、楼が今駆けつけますよ！お嬢さ～~~~~~ん！！」

凧の声に反応するように飛び起きた楼が人間技とは思えないほどの跳躍を見せながら凧に向けて一直線に飛びついてくる。

「なっ！」

「わっ！」

素早く勢いがありすぎて少年も凧も反応が仕切れない。

「お嬢さん~~~~~」

「……………自重しろ、と何度言わせる？」

心なしかドスの効いた苑王の声は大きくはないのにその場にいた全員に届いた。

「え、あ、ち、ちがっ！うぎゃ！」

空中で正気に戻ったらしい楼だったが苑王が繰り出した長い足に蹴られ、表現しがたい擬音と共に再び床とお友達になった。わずかに床にめり込んで見えるのは気のせい？気のせいなのか？

「きゃー！！お医者様が床に！！医者？……………変態？いやいや一応、医者？でも飛んでたからやっぱり変態？」

変態？医者？と呟く凧に苑王がドキッぱりと一言。

「ただの変態だ」

「違いますよ!!」

さらりと変態認定する苑王に楼が速攻に否定するが少年が己の記憶喪失も忘れて胡乱な瞳で踏まれ、床に伸びる楼を見る。

「否定できないと思う……」

「変態ですか!でも一応は医者ですよね!!この子、見てもらわないと!!」

少年を抱き寄せ必死に治療を懇願しているが失礼極まりない風の発言に楼が涙目になる。

「変態否定して!!それと一応じゃなくて僕は医者!!王宮付きの優秀な医者なの!!」

「変態でも医者ならいいから早く見てください!!」

「変態じゃな~~~~~!!」

楼の叫びが部屋に響いた。

「ふむ、特に怪我とかなさそうだし頭を打ったわけでもない。外的要因ではなく内的要因だとしか今の所はいえませんか」

てきばきと少年を診察した楼はさらさらと診察結果と自分の見解を

述べていく。診察書に書き込む姿は確かに出来る医者のように見える。今までの言動を見ていたら「今度はなんの遊びですか？」といったくなるのだが、それはそれと風はぐっと突っ込みを堪えた。

「あるいは……………」

「楼？」

「ふむ。僕の領域ではない魔術の類で記憶を奪われている可能性もあります。僕は医療一筋で魔力がないですからそっち方面のことは専門外なもので」

なにやら診察書に書き込むとそれを机に置く。ふうと息を吐くと椅子に不安そうに座る少年とベットに眠る少年とを見比べる。

「まあ、取り合えずはこの子たちは僕が責任を持って預かりますよ。いいですよね？苑王」

「ああ……。このまま放りだすわけにもいかぬからなそうしてくれ」と助かる」

少年達の処遇が一応決まりそうな流れに黙っていた風の服の袖がクイとひかれた。

視線を向ければ不安そうな顔の少年。どうやら無意識に風の服をつかんでしまっていたらしく風の視線に気づくとびくつと肩を震わせ服を離す。

まだ、何かを話している苑王達の方に視線を戻すがその横顔は青白く確かに不安と心細さが見えた。

何か考えた行動ではない。

正直に言うところ一番と言うところで凧は理性より衝動で行動を起す。だからこの時も理性が働くよりも早く衝動で動いていた。

離され、強く握り締められていた少年の手を掴み直す、離されていた視線が驚きを伴って戻ってくる。それに力強く笑いかけるとその言葉を口にした。

「あの！この子達、私が預かります！」

掴んだ手は温かい。これは護るべきものだ、と凧はそう、思った。

状況把握 2

風の言葉に場に沈黙が訪れた。

少年は目を見開き。

楼は「え？え？ええええ？」とタダひたすらに風を凝視し。

そして苑王はただただ静かに突拍子のない発言をかました己の王妃を見据えていた。

三者三様な視線に晒され、さすがに理性が戻ってきた風は「えっゝゝと」と先ほどの勢いはどこへやらもごもごと縮こまってしまふ。だが、発言を撤回する気はないらしくチラチラと上目遣いで苑王と楼に無言の訴えをしていた。

本人に自覚はないがその行為は小動物ぽく他者に映った。

それを直に見せ付けられた苑王の眉がぴくりと動き、続いて隣にいた楼が悶えた。

「うっ！女の子の必殺技、上目遣いの「お願い」を使ってくるなんて……！！王妃さま、実は小悪魔け……ぎゃん！すんません！！なんでもありません！！」

「……………」

頬を染めて何かを言いかけた楼だったがすぐに青い顔に変わり頭を振った。何故だか痛そうに足を押さえている。

「あの？」

「いや。あははははははははは！！」

笑って誤魔化された。

その隣でいつも以上に冷たい顔をした苑王がいたがダラダラと脂汗を流す楼以外に気づく者はいなかった。

「はぁ……………」

重いため息をつく苑王に風がびくびくと肩を震わせる。前言を撤回する気はないがほぼ交流がないこの夫に対してどこか気後れしてしまうのは止められない。

だけどこの人を説得できないと色々と前に進まない。

「苑王、ダメでしょうか？」

「貴女は私が許可すると思っているのか？」

冷静に言い返されて思わず詰まる。

「うっ！無理を言っているのは承知していますが……………」

「承知しているのなら結構。楼、このままこの子供たちを預かって……………」

「だ、だめえ！」

楼の方に何か言いかける苑王の腕に思わずしがみ付いて止める。きゅーと必死に縋りつく風。

別にしがみ付く必要性はないが思わずしがみ付いてしまったものはない。とにかく事態を決定する言葉だけは言わせたくない一心での行動であった。

窓から差し込む夕日が海に沈んでいく。最後の光が淡く部屋を染め上げそして消えた。

しがみ付かれた苑王が硬直したのには気づかずに風はべらべらと言葉を並び立てる。

「えっと……あの……とにかく、駄目、です」

「……………」

「話し合い。そう、話し合いを。話し合いこそ相互理解と平和的解決の糸口で……苑王？」

「……………」

「……………なんでもない」

かなり長く沈黙した苑王はそれだけ言う。沈黙を不審に思い顔を上げれば何故だか顔は思いつきり風から逸らされていた。

「あの？」

事態が分からない風が首を傾げる後ろで「ぶほお！」と吹き出す声が響いた。

振り向けば入り口にしゃがみ込み腹を抱え震える男の姿。

「……………誰？」

いきなり現れて笑い転げている彪流に少年は胡散臭げに眉をひそめる。

「くっ………ははっ！だめ、おもしろすぎっ！」

何がそんなツボにはまったのかガンガンと近くの壁を叩く。プルプルと震えながらタダひたすらに笑う男の名を苑王の怒りの籠った声が呼ぶ。

「そこで………何をしている！彪流！！」

王の右腕と謳われる金髪の騎士は笑いすぎて滲んだ目元を拭い一つもにやりと彼独特の内心を読ませない胡散臭い笑みで「どもっ」と手を上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2333p/>

王妃様の副業

2011年11月24日23時16分発行